

主 題：主の御業とともに励む

聖書箇所：コリント人への手紙第一 16章5-12節

パウロは異邦人への宣教のために主によって召された人物です。主はこんなことを言われました。使徒の働き9：15「…行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」と。こうして主によって召されたパウロは、信仰をもってからローマで殉教するまでの約30年の間、彼はその使命に忠実でした。現在のイスラエル、シリア、レバノン、トルコ、ギリシャ、ローマで主イエス・キリストの救いを宣べ伝えたのです。また、彼はイルリコという地域まで出掛けていったことがローマ書に記されています。実は、それは現在のアルバニアの北の地域に当たります。また、そこだけに留まることなく、パウロ自身はイスパニアにまで宣教に出掛けることを願っていました。つまり、スペインに出掛けて行って伝道をしたいと願ったのです。ローマ15：19、23、28「:19 また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。/:23 今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニアに行く場合は、あなたがたのところに立ち寄ることを多年希望していましたので/:28 それで、私はこのことを済ませ、彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通過してイスパニアに行くことにします。」。このように機会を用いて主が与えてくださったところに出掛けて行ってキリストの福音を語り続けたのです。

このコリントの町でも熱心に福音を語りみことばを人々に教え続けました。実は、今日見ていく16：5-12にはパウロ自身もっていた宣教哲学を見ることができます。彼はどんなことを考えながら、どんなことを思いながら宣教を続けたのか？私たちはパウロが教える宣教について大切な五つのポイントを今から見ていきます。これはあなたも同じように主によって召された者ですから、あなたにも宣教の務めが与えられています。ですから、ぜひ、この五つのポイントをしっかりと覚えてそれに沿って宣教して下さることを心から願っています。

☆パウロの教える宣教についての大切な五つのポイント

1. 計画を立てる 5-6 a 節

「:5 私は、マケドニアを通過した後、あなたがたのところへ行きます。マケドニアを通るつもりでいますから。:6 そして、たぶんあなたがたのところに滞在するでしょう。」と書かれています。パウロがこの手紙を記したのは、ちょうどコリントの対岸にある現在のトルコのひとつの町エペソというところでした。そこからパウロはギリシャの北マケドニアを通過して、南に下ってコリントの町を訪問するという旅行の計画を立てたのです。「私は、…マケドニアを通るつもりでいます」と「通る」とは「そこをただ通過する、通り過ぎる」ということです。このことばから、パウロはマケドニア地方に長く滞在することは考えていなかったのです。彼は一刻も早くコリントに行きたかったのです。

そのパウロの思いを読み取ることができますが、その後には滞在の期間まで計画していることが記されています。「冬を越すことになるかもしれません。」と書かれています。11月から2月頃までの期間は海を通る旅行は危険でした。海が荒れるからです。ですから、このときは航路を避けて陸路によって旅行しました。パウロはそのことを心得ていたので冬の期間は旅行することは止めてコリントに滞在したいと言っているのです。それが彼のプランでした。確かに、コリント人への手紙にはこのプランだけが記されているのですが、実は、もう一つのプランが存在していたことが次の手紙の第二に記されています。マケドニアを通過してコリントを訪問するというプランです。

でも、パウロにはもう一つのプランがありました。それはコリントの町を二度訪問するプランでした。最初にコリントに行ってから北に上ってマケドニアを訪問し、そこからもう一度コリントに戻ってユダヤへと旅をするというものでした。これならコリントを2回訪問できると、このようにパウロが計画していたことがⅡコリント1：15-17に書かれています。「:15 この確信をもって、私は次のような計画を立てました。まず初めにあなたがたのところへ行くことによって、あなたがたが恵みを二度受けられるようにしようとしたのです。:16 すなわち、あなたがたのところを通過してマケドニアに行き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに帰り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。」、実現できたのは最初の計画でした。マケドニアを通過してコリントへ行くという、この計画が実現したのです。

この2回訪問するという計画が実現しなかったことで、教会の中にパウロに対する、また、パウロの教えに対する信憑性を疑う動きが起こったことを聖書は私たちに教えています。特に、今見た箇所の続き1：17には「そういうわけですから、この計画を立てた私が、どうして軽率でありえたでしょう。それとも、私の計画は人間的な計画であって、私にとっては、「しかり、しかり」は同時に、「否、否」なのでしょうか。」

と、パウロが言いたいことは、自分が立てた計画は思い付きではなくよく祈りながら考えて立てたということです。二つのうちのどちらかがベストであると考えたのです。ですから、「いや、パウロはあんな計画を口にしてはいるけれど実現できなかった。だから、信頼できない。」という人たちに対して、このように反論するのです。

パウロという人を見たときに、パウロは神のみこころに忠実に従った人物です。この後にも出て来ますが、パウロはどんなときにも神のみこころに従うということ、神のおことばに従うこと、神が喜ばれることを行っていく、そのことに彼自身は徹していました。少なくとも、私たちが覚えなければいけないことは、確かに私たちはいろいろな計画をもっていますが、でも、大切なことは主の計画に従うということです。主のみこころに従うということです。皆さんも最善と思う計画を立てても、様々なことでその計画の変更を余儀なくされたことがあるでしょう。私たちは計画を立案するときに、その計画が主のみこころに沿ったものとなるために主の知恵と導きを祈り、最善と思えることを選んでいきます。

しかし、それでも主はその計画を変更されるときが出て来ます。どうするか？主のみこころに従うことです。計画を立てても主は別の計画を備えておられるなら、それに従うことです。恐らく、そのようなことは皆さんもこれまでの信仰生活の中で何度も学ばれたことでしょう。私にもいろいろなことを通して神は教えてくださいました。1979年にミシガンの大学を卒業するときに、この後何をするのか？私が考えていたことはただ一つ、その当時のソ連に出掛けて行って伝道することでした。そのことしか考えていなかった。ありとあらゆることがその方向に私を押し進めていくようでした。高校卒業の頃だったかもしれません。横浜にソ連からの船が入ったということで、出かけて行って船に乗り込んでロシア語の聖書を渡していました。アメリカに渡った後もそうでした。ある時、ラジオの放送で、ソ連でクリスチャンが迫害されてアメリカに渡って本を書いた人「イーストウィンドウ」を書いたその著者が来ると言います。「会えます！」と言われて私は真っ先に行こうと思いました。聞きたかったのです。どうすればソ連に行けるのか？どういう働きができるのか？とそのことしか考えていなかった。それを知った私の知人は「卒業式に私の父親が来るから話して見たら…」と言ってくれました。その父親は西ドイツでソ連から亡命して来る人たちに伝道していると言います。その機会をもちました。「私はどうしてもソ連に行きたい。どうすればいいですか？」と尋ねました。いろんなことを言ってくださったのですが、今でも憶えているのはこうです。「日本に行きなさい。トランスワールドラジオには450人位の宣教師がいるけれど、日本人宣教師は一人もいない。あなたは日本人に対して伝道するべきだ。」と。

どんな思いで私はそのメッセージを聞いたか、想像つきますでしょう？「ありがとうございます。でも、結構です。そんな答えを私は求めていません。」と。彼は2週間後にある教会に別の宣教師が来るからその人と話したらいいと言ってくれました。そこに行って同じことを聞きました。同じ答えでした。「日本に…」と。「ありがとうございます。でも…」と。ある日曜日の夕方、今も春に沖縄に宣教師を送ってくれているグレースバイブル教会の夕拝に出掛けました。メッセージはトランスワールドラジオの宣教師でした。その後、私は同じことを聞きました。「私はソ連に行きたいのですがどうすればいいですか？」と。答えは想像できますね。「日本に行きなさい」です。

この時点で、もしかすると神は私に何かをおしゃっているのではないかと思いました。幻を見たわけではありません。でも、こうして話を聞くと皆が「日本に…」と言われる。祈り始めました。「神さま、私はこれまでずっとソ連が私の宣教地だと思っていました。でも、それがみこころでなければどこにでも行きます。どうか、導いてください。」と。何が起こったと思いますか？「日本に行きたい」という思いを神はくださったのです。そのように神は私たちの心の中に働いてくださる。問題は主のみこころに喜んで従うかどうかです。計画を立てることはできます。でも、覚えていなければいけないことは「主のみこころに従うこと」です。

2. チームワークである 6b節

宣教とは「チームワーク」だと言います。つまり、共同作業です。一人でするのではなく互いの助けが必要だということです。ですから、6節に「…それは、どこに行くとしても、あなたがたに送っていただくと思うからです。」とあります。パウロが望んだことは、彼が主から召されたその働きをコリント教会とともに行うことでした。自分一人でできるから協力は要りませんではないのです。彼は人々の助けが要ることを心得ていました。というのは、宣教はチームワークだからです。Iコリント3:6に「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」と書かれている通りです。私は種を蒔く働きをしたけれど、その後だれかが水を注ぐことをしなければならぬ。その働きはアポロがしたと言うのです。

ですから、宣教の働きにはいろいろな人がそこに絡んでいます。実際に現地に赴いて働きを為す人、自分の国にあって自分の教会にあってその働きを祈りや献金で支える人もいます。こうしていっしょに働くのです。神はすべての人を海外に送ることはありませんが、ときに、そういう人を起こしてくださる。

そのときにはみな協力してその働きに加わるのです。パウロはそのことがよく分かっていました。ですから、コリント教会が彼の新たな働きを支援してくれることを願ったのです。

そして、実際にパウロの働きを支援している教会が記されています。それはピリピ教会です。パウロ自身がこのように言っています。ピリピ4：14-18「14 それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくれました。15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれました。17 私は贈り物を求めているではありません。私のほしいのは、あなたがたの収支を償わせて余りある霊的祝福なのです。18 私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けくださる供え物です。」と。ピリピ教会はパウロの働きを金銭的に物質的に支援したのです。

同時に、彼らはエパフロデトをパウロのもとに派遣するのです。そして、彼がパウロとともに働くことでパウロ自身が励ましを得ることになるのです。こうしてチームとして働くのです。ですから、私たちは教会にあって互いに祈り合うのです。なぜなら、その人が直面していることを共有することによって、私たちはともに神のみわざを見ることになるからです。多くの人は「いや、私のために祈ってもらう必要はないです」と言いますが、もったいないことです。私たちはお互いのために祈り合えるのです。

そして、祈ってもらうことはそれを依頼した人だけでなく依頼された方にとっても祝福なのです。なぜなら、それによって神のみわざを見るからです。だから、私たちは互いに祈り合おうとします。互いにどんなことでもシェアし合おうとします。皆さん、こうして今私たちの教会を見るときに、自分たちの力でやって来れたと思いますか？多くの祈りがささげられています。

エストライク先生がまだ地上におられたときに、私もできるだけお顔を見てお話をしたいと一年に一回くらいお会いしていましたが、あるときこんなことを言われました。「ミシガンに行ったらこの教会を訪問してほしい」と…。というのは、その教会はエストライク先生がこの日本に浜寺に来られたときからずっと支援していた教会だからです。ある水曜日の祈禱会に私は出席しました。そこにいる人はだれも分かりません。終わってから牧師先生から「今日、あなたはどのように来られたのですか？」と尋ねられ、「実は私は…」と説明しているときに、エストライク先生のことを憶えておられる方がいました。彼らはみな神に感謝をしました。つまり、自分たちがその宣教師の働きを支え、そして、こうして実が生まれたと…。チームワークです。言ったように、あなたが海外に行かなくてもこの場所においてその働きを支えることができるのです。ともに、その地の宣教の働きに加わることができるのです。

パウロはそのことがよく分かっていましたから、彼はコリント教会の人たちによって送り出されることを、彼らの援助を受けて働きを為すことを願っているのです。

3. 愛によって働く 7 a 節

7 節「私は、いま旅の途中に、あなたがたの顔を見たいと思っているわけではありません。…あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています。」と、つまり、パウロはこの宣教旅行の合間に時間ができたなら、あなたがたのところに立ち寄り「あなたがたの顔を見たい」とは言っていないのです。パウロは行くだけでなくそこに滞在したいと願っていました。なぜ、パウロはそのように願ったのか？実は、Ⅱコリント2：4に「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。」と書かれていて、つまり、パウロはコリント教会の人たちを愛していたのです。だから、彼らのところに行って彼らと時間を過ごしたかった、彼らとともに神を崇めたかったのです。それが彼の動機でした。

私たちがだれかのところを訪問してキリストの福音を伝えること、だれかと主のみことばをシェアするとき、問われるのは「私はこの人のことを愛しているのかどうか？」です。愛を動機としていなければその働きはむなしです。私たちは神を愛するから神のみこころに従っていきます。神は「私はあなたを愛します、愛します」と一日に何回も言っているからお喜びになるか？とんでもない！神を愛しているかどうかはみこころに従うかどうかによって明らかなのです。また、私たちは人を愛するから彼らのために最善を為そうとします。人を愛するから彼らに福音を語りたいとするし、人を愛するから彼らの成長を助けたいとします。

そのようにして多くの宣教師たちが私たちの国に来てくれました。ある一人の宣教師のことを最初に聞いたのはこういうことでした。その先生がかなり高齢になって、最後は生まれ故郷で過ごすのがいいだろうと家族も友人たちもそう判断してアメリカに戻ることを勧めました。その先生が言われたことは「私の国はここだ。私の故郷はここです。主が召してくださったこの国だ。私はこの国に眠りたい。」でした。いったい、何がこの人たちを駆り立てるのでしょうか？「愛」です。「この人々のために一番必

要な福音を語りたい！この人たちの成長のためにみことばを教えたい！」と。

パウロの宣教を見るときに、その動機は何だったのか？愛でした。コリントの教会を愛して彼らのもとに行き彼らの助けになりたい、彼らの励ましになりたい、彼らの成長を促したいと、そのような思いをパウロ自身が抱いていたことをみことばは私たちに教えてくれます。

4. みこころに服従する 7b-9節

先にも見ましたが、どんなときにも「みこころに服従する」ということです。7節の後半に「主がお許しになるなら、あなたがたのところにはしばらく滞在したいと願っています。」と書かれています。「お許しになる」とは「だれかが何かをすることを許可する」という意味です。ですから、パウロは計画を立ててそれを何が何でもやる、ということではないのです。神がそれをよしとされたなら「やります」なのです。パウロは自分のやりたいことはするけれど、やりたくないことはしないと自分の願いを叶えるだけを考えていたわけではありません。自分の計画があって、これがベストだと思うことがあります。でも、それが主のみこころでなければ従わないのです。自分の考えでなく主のみこころに従うのです。どんなときでも主のみこころにだけ従うとそうのように考えて、そのように生きていたのです。

8節には「しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。」とあります。これを読むと明らかにもうパウロ自身が決めていたことです。「五旬節」とは「ペンテコステ」のことです。言い方を変えるなら「聖霊が下ったことを記念する」ということで「聖霊降臨祭」と言われたりもします。使徒の働き2章に書かれています。約束されていた聖霊がイエスを信じる者たちの上に下るというペンテコステです。この出来事はイエス・キリストの復活後50日目のことです。ですから、復活祭から50日目にあるのがこの五旬節といわれるペンテコステです。ですから、毎年日が変わります。今年は復活祭が4月4日、それから50日目の5月23日がこの日に当たります。パウロはその五旬節までエペソに滞在するつもりだと言っています。

パウロはなぜエペソに滞在することを決めていたのか？その理由が9節に書かれています。「というのは、」という接続詞が付いています。「働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。」と。パウロ自身にはこんな確信があったのです。

1) 主からの宣教の機会 : 働きのための広い門が私のために開かれており、

宣教の機会が今自分に与えられていると言います。ですから、パウロはエペソに留まって働くことが主のみこころだと確信していたのです。そして、確かに、これが主のみこころであったということは彼が主に大いに用いられたことによって知ることができます。このパウロのエペソ伝道のことは使徒の働き19章に見ることができます。19:8、9「:8 それから、パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。:9 しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。」とあります。

「ツラノの講堂」と書かれています。ツラノとは場所の名前ではありません。これは人物です。そして、講堂と書かれていますので、これは恐らくどこかの学校でしょう。ですから、ツラノはその所有者かその学校の教師の名前だったのだらうと言われています。パウロはその講堂を借りて主のみことばを語るのですが、恐らく、この場所を借りることができたのは学校がない時間帯です。この地域には「シエスタ」という昼寝の習慣があります。大体11時から4時位の間です。ですから、その時間にそこを使うこと許されたのでしょう。

そして、10節を見ると「これが二年の間続いたので、」とあります。2年間そのようにして彼はみことばを語り続けたのです。その結果どうなったのか？「アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。」とあります。すごいことが起こったと思いませんか？アジアとは今のトルコの一部です。地図を見てください。そこに住む者はみな主のみことばを聞いたと言うのです。驚くようなことを神はパウロを通して為されたのです。

また同時に、パウロは大きな奇蹟を行うのですが、今そのすべてを見る時間がありません。19章の後半を見てください。18節から「:18 そして、信仰に入った人たちの中から多くの者がやって来て、自分たちのしていることをさらけ出して告白した。:19 また魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった。:20 こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。」とあります。神はすごいことを為されたのです。このように「魔術を行っていた多くの者」たちが救いに与るのです。そして、自分たちが使っていた書物を全部持って来て人々の前で焼いたと、彼らの生き方は変わったのです。救いに与ったのです。このようなみわざを主は為されたのです。「主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。」と。神はすごいことをこの地域で為されたのです。パウロは神がこの機会を備えてくださったと確信していました。それで彼はその機会を捉えたのです。

神はいろんな機会をくださる。問題はそれをあなたが捉えるかどうかです。その導きに応えるかどうかです。1992年に私が神学校を卒業する前の1991年12月25日、かつてのソビエト連邦は崩壊しました。そのことは私たちはニュースを見ていました。実は、それは福音のための扉が開かれたその瞬間でもありました。私もそこを訪問した人たちから聞いたことは、100人を超える牧師や教師たちが自分たちのところにやって来て、訓練を求めている、「教えてくれ」と言っているということです。

神学校時代の1992年、ある日のチャペルのときだったと思います。ある先生が来て毎回のよう「ソ連が開かれる。あなたたち卒業生はこの機会を逃してはいけません。今すぐソ連に行くことだ。」と言われるのです。最初はびっくりしました。そんなことが本当に起こっているのか？と。でも、確かに起こっていました。感謝なことに、卒業生のうちの何人かはそのチャレンジに応じて、彼らはベラルーシやロシア、ウクライナに出掛けていきました。そして、そこで彼らの要望に応じて神学校を始めて、実際に彼らが教えた生徒たちが今は教師となって教えていると言います。もういつ彼ら宣教師が引き上げてもいい、十分な訓練が為されたからと。神はそのような機会をくださったのです。大切なことは、その機会に応えた人たちがいたということです。

繰り返しますが、神は皆さんを外国に召そうとしているわけではないですね。でも、皆さんはいろんなところに遣わされていますが、何となく一日を過ごしていませんか？「主よ、どうか私を使ってください。あなたの栄光のために、あなたのすばらしい福音を伝えるために私を使ってください。だれかの祝福になるために、だれかの信仰の成長の助けになるために私を使ってください。」と、こんな祈りをあなたの祈りに加える必要があると思いませんか？なぜなら、みな神によって用いられて来たのです。その人たちに共通していることは、このように神が機会をくださったときに彼らはそれを逃さないで応えたのです。「主よ、使ってください。私があります。」と。あなたはどのように応答するのか？それとも「神さま、私はだめです。私以外の人を遣わしてください。」ですか？神はこうしているような機会をくださった。そして、その機会を逃すことなくその神の召しに応じていく人に神は働き、その人たちを用いて主のみわざを為したのです。パウロを用いてエペソですごい働きを神が為されたように…。

2) 主への信頼の機会 : 反対者も大勢いるから

9節の後半に「…反対者も大ぜいいるからです。」とあります。普通は反対者が大勢いるとそういう場所は避けようとしませんか？パウロはそのことを知っていながらも喜んでそこに出掛けてそこに留まり続けようとしています。先に見た使徒19:9に「しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、」と、そのような人たちが確かにいたのです。

また、同じ19:23からはデメテリオという銀細工人のことが書かれています(19:23-20:1)。この人はエペソに存在した世界七不思議の一つであるアルテミス神殿の模型を作ってそれを売って儲けていたのです。ところがパウロのメッセージを聞いた人たちが「手で作った物など神ではないと言っている」と言います。すると、彼らはこれは問題だと思いました。みながそのように思ったならせっかくの模型が売れない！と扇動して、街の中に騒動が持ち上がったことが書かれています。主のみわざが為されるときには必ずそれに反対する働きも為されるのです。でも、パウロはそのようなことを知っていながらも喜んでエペソに滞在し、働きをなお継続しようとしていました。その理由は「困難は私たちにとってありがたいこと」でもあるからです。

困難を通してしか学べないことが実はあるのです。困難は必ず宣教に付き物です。困難を通して私たちは大切なことを学びます。それは自分の力に過信することなく神に頼ることを学ぶのです。困難が生じると私たちは自分の力ではどうにもならないということに気がきます。だから、神に助けを求めます。そのときに神の助けを経験することによってどんなときにも神に信頼を置いて助けを求めたらいいのだということを学ぶのです。ですから、困難によって私たちは自分がいかに力のない者か、弱い者か、そのことを教えられて謙虚にされていくのです。このように私たちクリスチャンに与えられたすばらしい特権を行使することになるのです。私たちはこうして学び成長していくのです。

ですから、困難によって大切なことを学びます。パウロはそのことを知っているのです。

・**困難によって学ぶこと** = どんな困難があっても勝利者である神がともにいてくれるということです。私たちの力は神です。その方がともにいてくださるのです。困難を通して私たちはいろんなことを教えられます。その一つは、神がどのようなお方かということです。どれ程すばらしく力に溢れ、知恵に溢れ、この方に信頼できることがどれ程すばらしいことか、そのことを学びます。ですから、反対者が大勢いることを知っていながら、なお、パウロは怯むことなく前へ進んで行こうとするのです。

・**あなたが信仰ゆえに迫害される理由** : もう一つは、なぜ、世の中はあなたを迫害するのか？です。あなたが何か悪いことをしたからではありません。でも、いろんな迫害が出て来るし、みなあなたがあなたのことを良く思わないのです。なぜでしょう？みことばが教えています。人々があなたのうちにイエスを見るからです。イエスが地上におられた時、人々は彼を歓迎しませんでした。イエスを十字架へと追い

やってきました。イエスを憎んだ人が溢れていたのです。すべてにおいて完璧だから、愛においても赦しにおいて聖さにおいても、すべてにおいて完璧でした。そのような人が傍にいと煙たく感じるのです。だから、あなたが神に喜んで従おうとしたときに周りの人たちはあなたを歓迎しないのです。あなたのうちにイエスを見るからです。

だから、いろんな困難を経験することは当然のことなのです。私たちの先輩たちはみなそのように生きて来たのです。パウロもそのように歩んだのです。Ⅱコリント4：10-11にはこのように書かれています。「10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。」と。パウロは大変な反対者がいること、困難が待ち受けていること、それらを知って上でそれでも主に従い続けたのです。

なぜ、彼はそのような歩みをしたのか？それはこういうことです。パウロは自分が人々から称賛されることを決して願っていませんでした。パウロが考えていたことはただ一つ、主だけが誉め称えられることでした。そして、そのことを実現するためにはパウロ自身主のみこころに従うことが必須であると確信していたのです。私が神のみこころに従っていくことによって、私ではなく私を変えてくださる神、私を使ってください神、この方が誉め称えられること、それを望んだのです。だから、彼は益々熱心に主のみこころに従おうとしたのです。

忠実に生きること、主のみことばに従い主の栄光のために生きること、主のために生き霊的に成長すること、それらは主がお喜びになることです。私たちがそのように歩むなら、私たち自身が主の栄光を現す人になっていきます。主の栄光を現す人であるなら、神は間違いなくその人を用いてくださいます。皆さんにお尋ねします。あなたはどのように生きたくありませんか？確かに、この人生をそのように生きることこそが主の前に価値ある人生です。主が成してくださった犠牲にふさわしい感謝な生き方です。そのように生きたいとあなたは願いませんか？

パウロは神のみこころに従っていく、何があっても従っていくと、そのように願いそのように決心しそのように歩んだのです。もし、あなたがそのように願って歩むなら、必ず、神はあなたをみこころに基づいて導いてくださるといふことです。

☆心からみこころに従いたいと願う者を、主は必ずみこころを示し、導いてくださる

パウロたちの第2次宣教旅行を見たときに、パウロたちが行こうとしたその道を神が止められたことがありました。使徒の働き16：6-10「6 それから彼らは、アジャでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、ピテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。8 それでムシヤを通過して、トロアスに下った。9 ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、「マケドニヤに渡って来て、私たちに助けてください」と懇願するのであった。10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私たちに招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。」、確かに、神はこのような形でも働かれます。当時、神のみことばが完成していないときはこのような方法で神は働かれたのです。今の私たちはこうして聖書を通して主のみこころを知ることが出来ます。

・主のみこころを知るために

一つ言えることは、あなたが神のみこころに従うことを決心し神の前を正しく歩んでいるなら、神は確実にあなたを導いてくださるといふことです。そのために二つの聖書の箇所を記しておきました。

箴言3：5-6「5 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。6 あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」

主があなたの道をまっすぐにしてくださる条件です。「心を尽くして【主】に拠り頼め。」と主に信頼を置くのです。

- ・自分の悟りに頼るな＝自分の考え、自分に頼って生きることをしないのです。
- ・主を認めよ＝これは「主を知る」といふことです。同時に、「意識する、交わりをもつ」という意味も含んでいます。だから、いつも主の臨在を覚えながら生きるのです。いつも主の目が自分に注がれているのです。そのことを覚えてそのように生きるのです。ですから、主に信頼を置いて自分の考えや知恵に頼らず主の前を正しく歩んでいくなれば、主はあなたの道をまっすぐに正しい道を示してくれると言います。

詩篇37：5「あなたの道を【主】にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」

- ・ゆだねよ＝すべてのことを主に信頼してゆだねなさいと言います。
- ・信頼せよ＝この「信頼」といふことばは「安心感を得る、心強く思う」という意味です。神にゆだねるなら私たちは本当にそこに安心感を得ます。神が導いてくださると確信できるからです。自分で一生懸命思い煩うのではないのです。すべてを分かっておられる神にすべ

てをゆだねたときに私たちは心強く思います。神が導いていってくださるから…。

パウロはこのようにして生きたのです。このようにして信仰の勇者たちは生きたのです。そして、私たちもこのように生きていくことができるのです。皆さん、私たちはいろいろなことを考えいろんな計画を立てます。でも、主のみこころが最善だと知っているゆえに、そのみこころを求め続けるのです。すべてをゆだねて主のみこころに喜んで従う決心をして、後は神が導いてくださるといことです。

皆さん、主のみこころに従うということは、どんなに自分がいやだと思っても、主が「やりなさい」と言われたなら「やる」という決心です。あなたが「みこころに従います」と言いながら、「但し、条件があります。私のやりたいことならやるけれど、いやなことならやりません。」と、これはみこころを求めた生き方ではありません。みこころを求めている人なら、たとえ、それが自分のやりたくないことであっても「主がやりなさいと言われるならやります」と、そう願って祈りながらやるなら神はちゃんとあなたを導いてくださるのです。

5. 一致して働く 10-12節

1) テモテ : 10-11節「:10 テモテがそちらへ行ったら、あなたがたのところで心配なく過ごせるよう心を配ってください。彼も、私と同じように、主のみわざに励んでいるからです。:11 だれも彼を軽んじてはいけません。彼を平安のうちに送り出して、私のところに来させてください。私は、彼が兄弟たちとともに来るのを待ち望んでいます。」。使徒19:22には「そこで、自分に仕えている者の中からテモテとエラストのふたりをマケドニアに送り出したが、パウロ自身は、なおしばらくアジャにとどまっていた。」と、パウロはテモテとエラストをマケドニアに送ったとあります。そして、マケドニアから今度はテモテが一人でこのコリントの町を訪問するのです。恐らく、このコリント人への手紙第一を持ってテモテはコリントへと向かったのでしょう。そのことはIコリント4:17が示唆しています。（「そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。彼は、私が至る所のすべての教会で教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。」）

コリントを訪問するテモテに対してパウロはコリント教会にこのメッセージを与えたのです。テモテをどのように扱うのかというメッセージです。パウロはテモテを自分と同じように扱ってくれるようにと求めています。「あなたがたのところで心配なく過ごせるよう心を配ってください。」と、つまり、滞在中のすべての必要を満たすようにと教会に勧めるのです。その理由が書かれています。「彼も、私と同じように、主のみわざに励んでいるからです。」と。ゆえに、11節に「だれも彼を軽んじてはいけません。」と、彼を軽蔑したり軽視してはいけないということです。私と同じように主に忠実に仕えるしもべだから、彼を大切に、私を扱うようにしてくださいと言うのです。

その後「彼を平安のうちに送り出して、私のところに来させてください。私は、彼が兄弟たちとともに来るのを待ち望んでいます。」とあって、パウロは自分だけが特別な扱いを受けるのではなく、テモテもまたその他の兄弟たちも同様の扱いを受けることを願っています。

2) アポロ : 12節「兄弟アポロのことですが、兄弟たちといっしょにあなたがたのところへ行くように、私は強く彼に勧めました。しかし、彼は今、そちらへ行こうとは全然思いません。しかし、機会があれば行くでしょう。」、アポロのことは使徒18:24-28にこのように書かれています。「:24 さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。:25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。:26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。:27 そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、そこの弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。:28 彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。」と、これが「アポロ」です。

パウロは彼に対して何を望んだのか？12節に見るように、彼がテモテたちといっしょにコリントに行くように、マケドニアに行き一緒に宣教の働きをするようにということでした。恐らく、パウロのうちにはアポロが同行することによって、コリント教会にはとても大きな益がもたらされるという思いがあったのでしょう。「強く彼に勧めました。」とあります。「しかし、彼は今、そちらへ行こうとは全然思いません。」と、パウロは確かにそう思っていたのです。アポロが行けるなら良いと。でも、神はアポロのうちにはそのように働いておられなかった、アポロ自身にそんな思いが与えられていなかったのです。それがみこころだという確信がアポロにはなかったのです。

でも、パウロは言います。「しかし、機会があれば行くでしょう。」と。なぜ、そのように言ったのか？アポロもコリントへ行くことが神のみこころだという確信が神によって与えられたならコリントへ行くでしょうと、つまり、こうしてパウロ自身はアポロも彼と同じようにみこころに忠実に歩んでいる者だという確信をもっていただけです。確かに、今はその確信が与えられていないけれど、神から与えられたならそのように行動するでしょうと言うのです。

結論 :

今日、私たちはこうしてパウロの宣教の哲学というものを見て来ました。計画を立てること、チームワークとして共同で働くこと、愛によって働くこと、また、どんなときもみこころに服従すること、そして、一致して働くこと、こうして私たちは主の働きを為していくのです。

・各自が主のみこころに従うこと

でも、皆さん、大切なことは、各人が、つまり、あなたが主のみこころに従うことです。あなたの主権者は神です。この方のみこころに従ってこの方を喜ばせることはあなたの責務です。なぜなら、その歩みこそが神の栄光を現す唯一の歩みだからです。

・主のみわざとともに励むこと

そして同時に、そのような思いを持って私たちひとり一人がともに働くのです。宣教のみわざはチームで取り組むことが必要だと、それがみこころだと教えられました。遣わされる者、遣わす者、語る者、祈る者、支える者、すべての人が主の栄光のためだけに働こうとするのです。パウロはそのような働きをして来ました。私たち自身もその働きを目指していくことが必要です。これが主が私たちに教えてくださることです。